

会議名	平成 29 年度 第 3 回みのかも定住自立圏構想共生ビジョン懇談会
日時	平成 30 年 2 月 22 日 (木) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分
会場	美濃加茂市加茂野交流センター (あまちの森)

会議録

●参加者 (敬称略)

<ビジョン懇談会委員・アドバイザー>

- ・加藤武志 (会長)
- ・高嶋 舞 (副会長)
- ・岸田眞代
- ・林 尚史
- ・加藤慎康 (美濃加茂市まちづくりコーディネーター)

<美濃加茂市・みのかも定住自立圏推進本部>

- ・【美濃加茂市】美濃加茂市長 伊藤誠一
- ・【みのかも定住自立圏推進室本部 (美濃加茂市市民協働部長)】大畑英樹
- ・【定住自立圏推進室】渡辺春文、佐合芳文、村雲洸佑、川上明里

- ### ●議題
1. 開会 (部長あいさつ)
 2. 懇談会
 - 前半：第 2 次共生ビジョンの振り返り
 - 後半：今後の展望について意見交換
 3. 市長あいさつ
 4. 閉会

●発言内容 (要約)

<1. 開会>

(事務局)

定刻になりましたので開始いたします。

本日は、会場を「あまちの森」に変更し、いつもと違った雰囲気での会としました。

また、本日の会は美濃加茂市長がビジョン懇談会委員の皆様と意見交換を行う目的で開催をしておりますが、八百津町長のご親族にご不幸がございまして、市長は葬儀に参列しております。従いまして、式が終了次第、こちらに馳せ参じる予定としておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

それでははじめに、定住自立圏推進部長であります、美濃加茂市市民協働部長よりご挨拶させていただきます。

(市民協働部長)

本日は雰囲気を変え、いつもの大所帯とは違って、委員の皆様と事務局、そして市長という少人数での実施となっております。どうかリラックスしていただき、忌憚のないご意見をいただければと思います。また、市長の件ですが、皆様もご存じでいらっしゃると思いますが、1月の選挙の結果、伊藤誠一が新市長となり、現在の美濃加茂市の市制を引っ張っております。本日は顔合わせの意味も含め、皆様との意見交換が出来る会としました。

事務局からご説明させて頂きました通り、本日は会の冒頭から市長も出席する予定でしたが、市長は現在、八百津町長ご親族様のご葬儀に出席しております。同じ圏域を担う八百津町長様のご親族ということで、どうしてもお悔みしたいとの市長としての希望であり、出させて頂きました。何卒ご了承ください。

さて、本日の会を執り行うこの場所ですが、加茂野交流センター「あまの森」と称しまして、2016年12月に完成した、美濃加茂市が誇る交流センターです。ワーキング方式で設計段階から地元住民の声を取り入れて建築しました。結果として費用は予算の倍かかってしまいましたが、今日もたくさんの学生たちが訪れているように、日々たくさんの人に利用していただいています。この施設は、まちづくり協議会が管理・運営しているという点が、美濃加茂市としては初めての試みとなっています。今後、加茂野まちづくり協議会を社団法人化し、全面委託して管理を任せたいと思っています。

話は戻りまして本日は、皆様にご協議頂きながら進めている第2次共生ビジョンや、平成32年度からスタートする見込みである第3次共生ビジョンをどのように進めて行くべきかということについて、市長を交えて意見をいただきたいと思っております。どうか忌憚なきご意見を頂戴いただきたく存じます。よろしくお願いいたします。

(事務局)

それでは本日の会の説明をいたします。

事前に概要をお知らせいたしました通り、本日は前半と後半に分けて会を進行させていただきます。前半では、これまで皆様から様々なご意見を頂戴しながら進めております「第2次共生ビジョン」についての意見交換とし、期間が残り2年となっていることから、残りの期間はどのように進めて行くように考えるべきかという意見をいただければと思います。前回の会では、各事業の連携市町村からの評価を可視化した結果、お互いの意識の違いが見えて参りました。これまでの取り組みの体制を含め、ご意見をいただければと思います。

休憩をはさみ後半では、平成32年度から第3次共生ビジョンの期間へ移ることになり、中心市の都市機能を生かしながら周辺市町村と連携していく圏域づくりや、現在のビジョンで注目している都市圏から人の流れを創り出す視点等、今後この圏域をどのように考え、定住自立圏について取り組んでいったらいいのかご意見をいただきたいと思っています。おそらく後半に移る頃に市長が到着できる予定ですので、市長を踏まえ意見交換が出来ればと思います。

本日の会では、不慣れでございますが、事務局が意見を板書させていただきます。合わせて宜しくお願いいたします。

それでは司会進行を、ビジョン懇談会委員長の加藤武志氏にお願いし、進めて参りたいと思います。

(加藤武志氏：以下、加藤会長)

改めましてこんにちは。本日の会は、事前に佐合係長と村雲氏とで進め方について相談した結果、このような形といたしました。市長が変わられたことによって意見交換の場にしたいとの意見があり、実施するならガラリと雰囲気を変え、お互いの距離感を短くしたかったので、市長とビジョン懇談会委員だけの会としました。そういうわけで、今日は事務局に板書をお願いしていますので、固い雰囲気ではなく、思った事や感じたことを素直に発言し、これまでの振り返りと、続けてきたからこそ感じる意見を共有できたらと考えています。

前半では、今までの振り返りを行い、「手ごたえ」と感じる良い面と、率直な課題や改善したい事、そもそも「定住自立圏」ですので、この街に住んでみたい・住みつけたいと思う「定住」や、この圏域で食べて暮らしていける工夫となる「自立」につながって

いるのかについて意見を言い合います。

それでは課題でも手ごたえでも、どちらでも構いません。皆さんからご意見をいただけますか？

(岸田委員)

では私から意見を出させていただきます。

本日の会では、「手ごたえ」と「課題」について意見交換をするとのことでしたが、何を以て「手ごたえ」とするのか不明瞭であると、率直に思います。手ごたえとは成果のことでしょうか？ 成果と言いましても、事業全部に対する成果と、各事業に対する成果の指標が全く異なりますので、どう整理すれば良いのか悩みます。

それを踏まえた上で、現在の評価を大雑把に述べますと、62～3点を付けたいと思います。ただこれは、20点と思う事業もあれば、80点と思う事業もあるので、平均点ということです。

その理由としては、はじめにこの事業を企画したとき、評価軸を定めて組み立てたのが分からないからです。それがあれば、私たちビジョン懇談会委員も、それに沿った事業評価ができると思うことがあります。ですから、市町村ごとに認識が違えば、事業の選考課程ですでに差がついてしまう。その意味でどう評価していけば良いのか難しく感じます。

次に、具体的に申し上げますと、坂祝町の子育て応援事業について、私は過去、様々な意見をお伝えさせていただきました。ですが、毎回の報告内容を聞きますと、私の意見について、どう反映されたのかが分からないのです。同じ意見を別の会で言っていることもありました。そんな状態で進んでいる事業にどう評価したら良いのでしょうか、疑問に感じます。

(高嶋委員)

私も岸田委員の言うように、どこへ走っているのかが分からないという事業がある、というのがざっくりとした感想です。

前は所要で途中退席してしまって、全ての事業進捗の報告が聞けなかったのですが、前回報告された内容では、「うまく知ってもらえない」との意見が多かった覚えがあります。一緒に連携したり、一緒に情報発信できそうな事業がいくつかあるのに、みんなバラバラに実施されていることが、せっかく同じ「定住自立圏」というプロジェクトなのに勿体ないと感じました。

この事業を、最後どう評価していくかということに結びつくのかもしれませんが、定住自立圏をどうしたいのかという絵が描けていないのではと感じます。

そもそも定住自立圏を目指す事業というのは、「知っていただく」「来ていただく」「体験していただく」「実際に住んでいただく」…というような段階（フェーズ：Phase）があると思います。この段階の中で、全体を通して次のステップへうまくつながっていくかがポイントだと思うのですが、うまく落としどころを持ってきていないというか、全体の中で絵が欠けているのではないかと思います。これは、事業同士が連携していないことに結びついていることでもあると言えます。

最終的にどんな終着点を持っているかを、事務局や委員会が示して上手く絵を描いていかないと、それぞれがやりたいことをやっているだけになってしまい、定住自立圏の目的に一致しないのではないのでしょうか。

(林委員)

私の言いたい事は次の3つに尽きます。

1つ目は、事業ごとにターゲットを改めて明確にした方がよいこと、2つ目は、事業フェーズが不明確であること、3つ目は、KPI設定を再設定した方がよいことです。

私は民間企業に属しているのですが、とても事業視線になってしまうのですが、とくに2つ目3つ目については、フェーズによってKPIも変わってくると思うのです。

先ほど、高嶋委員の意見でも出ましたが、この圏域のフェーズとは、以下の6段階があると思うのです。

- ①この地域を知ってもらう
- ②知ってもらった人たちに関心を持ってもらう
- ③関心を持ってもらった人達に実際にアクション（来訪等）をしてもらう

④来てもらった人たちと地元の人たちが交流してもらおう・再度来てもらう（リピート）

⑤定住を具体的に検討してもらおう（移住の意思決定）

⑥定住先のソフト面を充実させる

基本的には、すべての事業フェーズがこの中に当てはまるべきなのだと思います。そこが見えていないから、自分たちがどこのフェーズのために、どういうレイヤー（層）で、どういうターゲット（標的）に事業を実施しているのかが、各事業者が意識できていないのではと思います。どこの事業フェーズかによって、KPIも正しく設定できるはずなので、例えば、「①この地域を知ってもらう」という事業フェーズでは、とにかく認知していただくことが大事ですので、FaceBook等のPV数（閲覧数）を伸ばすというものでも良いと思うのです。「②知ってもらった人たちに関心を持ってもらう」については、名古屋圏や都市圏地域でのイベント参加数がKPIになるべきだと思います。同じように③では圏域にきた人の数、④はその中でもリピートして来てくれている人の数、⑤⑥は④の中で移住・定住を検討してくれている人の数…ということに結びつくKPIを設定した方が良いと思います。

具体的に申し上げますと、「みのかも魅力発信！名古屋交流拠点事業（通称：スキカモ）」では、イベント開催数がKPIとして設定されていますが、本来ならば名古屋でのイベント参加者数がKPIであるべきです。このような感じで、全体にも言えると思います。

（加藤慎康氏：以下、慎康氏）

私の場合は、皆さんと違い、途中から美濃加茂市のまちづくりコーディネーターとして、より近い位置で事業を見させていただいています。その中で感じたこととしては、いくつかの事業においては、定住自立圏と言いながら定住に繋がっているという感覚には、なりえなかったように思うものがありました。

また、これは内部の話になりますが、担当部署と連携先が、打ち合わせの中で事業の終着点を落とし込めていたのかと疑問に思う所があります。美濃加茂市だけの内部の発信を含め、この事業が情報として出てこないの、担当部署のメリットを含めて本当にやるべき事業なのかということについてもう一度検証すべきであると思います。

一方で富加町のマンガ事業（「織田信長の東美濃攻略」を活用した歴史PRマンガ作成事業）では、私たちの想像以上に手ごたえがあると思います。あのようなコンテンツ的なものから外にネットワークが広がっているので、定住の括りだけではなく、もう少しブーストさせた方が良いと思います。

また、今までの取り組みの中で、私たちは最初の企画の段階から関わっていないので、どんな目的で事業を始めるのかという主軸がぶれてしまっています。だから本気で意見を言いつらいと感じる場面がたくさんありました。

最後に、次回はもう少し突っ込んだ連携ができると良いと思います。定住というテーマをもう少し掘り下げて、各市町村が抱える課題とやるべき事に対し、お互いに密に連携できる話し合いが起これば良いと思います。

（加藤会長）

皆さん、ありがとうございました。ざっと見ますと…課題が羅列していますね。

私も岸田さんが点数を付けた60点というのは共感できます。

私を感じたことを率直に申しますと、人間関係が良くなったのは1つの成果だと感じています。まだ事業を採択する前、名古屋テレビ塔で開催した会議では、正直、その場に参加した事業提案者に対して心象が良くありませんでした。本当にやる気があるのかよく分からず、イラついていた覚えがあります。ところが、その後、事業が進んで職員同士が市町の範囲を超えて顔見知りになり、正直な意見を言い合えるようになってきたことが散見されるようになり、その意味で、人のつながりが良くなったと感じました。そして私たちビジョン懇談会委員も、実施者に対して頑張っている姿を見ているので改善したいという気持ちにもなっていた、ということも1つの成長だと思います。だからこそ、先ほど岸田委員の言うように、私たちの意見が反映されているように見受けられないことは、もう少し頑張ってもらいたい点でもあります。まあ、マンガ事業のように、私たちの意見とは別のところで、意外にもけれた事業もあることは否めませんが…。

私が全事業の中で注目しているのは、「里山再生プロジェクト事業」です。ベーシック（基礎的）な活動なのですが、自分の

地域を良くするという活動に好印象を持っています。主体が行政ではなく住民の皆さんということが印象的で、その場所だけでなく、市町を越えてつながりつつあるというのが、とても良いと感じています。他の事業でもこのような活動が起きてくれば、先ほど高嶋委員が「バラバラに動いている」と評価した事に対して、その原因が担当者の力量であるのか、テーマが難しいのかが分かってくると思います。

現在の第2次共生ビジョンは、どうしてこの事業が選ばれているのか疑問に思う事業（龍神さんの事業等）もあり、良かった面と悪かった面があります。また、先ほどの「フェーズ」の話もそうですが、以前、高嶋さんのアイデアで各事業のフェーズについて確認した会があったのですが、その時は自分たちの事業について考えたと思うけれど、きっとそれきりになってしまっていると思います。一生懸命に事業をやることは良いことであるけれども、KPIにも落とし込めておらず、定住というテーマにリンク出来ていないのであれば、一度リセットする時期に来ているのではないかと、個人的に思います。

1つ気になっていることは、補助としてお金を出し続けているからであると思いますが、『関わる人が固定化されている』という点です。前回のビジョン懇談会では、ポート王国プロジェクト事業に関わる団体の人が、自分たちの想いを伝えてきました。きっと、行政から頼まれた事業で、それに付き合ったんだという言い分も理解できます。しかし、それが既得権のようになってしまって、補助としてお金を出し続けることが、この事業を推進するエンジンとしてふさわしいのかという疑問も生じてきます。

話は逸れますが、私は現在、50歳、40歳以下の人と、とある事についてフューチャーセッションをしているのですが、民間のノウハウを持った人が来るので、彼らはすぐに、目的に沿ったプロトタイプの事業を実行されます。それらは自分たちで出来る範囲の小さな事業で、だからこそすぐにスタートできてしまうのです。このように、同じテーマで若い世代を集めて、新しい事業を生み出す活動をした方が、よほど予算が少なくても面白いと感じる事業が生まれてくるのではないのでしょうか。

新規事業が無い状態で、同じことを何年も続けていく事は、私たち民間の感覚ではありえないことです。各事業に成果が出ていけば別なのですが、出ない事業を切らずに続けていく事が、少し疑問を感じます。岸田委員の言うように、いつも同じ意見を言っているにも関わらず、また同じ報告をされていることも気になります。担当者もそのうち変わってきて、言い訳をする人が変わるだけという状態は、変えていっても良いと思います。

（慎康氏）

以前、各市町村の定住自立圏担当者が、希望者のみで飲み会を開いたことがあったのですが、あの時に出ていた意見は、前向きな話が多かった覚えがあります。内容がとても良かったので、そういう気楽に思考を発散させる場や関係性を作ることを、事業を考える席で実行できたら良いと感じました。そうすれば、本当にやりたいことが出てくるのではないのでしょうか。

あのような場が出てくる意見は、実はかなり地域資源を持っていることもあり、実際に「本当は〇〇なんだよね」という意見が出ていたので、本当に良い場でした。ですので、事業を検討する時にこういうことをやって、その中に私やビジョン懇談会委員の皆さんにも入ってもらい、話し相手になることは必要だと思います。

これは第2次共生ビジョンを進めている上でのプラスの話です。

（高嶋委員）

1つ質問なのですが、ずっと同じ事業を支援していく事について、変えてはいけないという規定があるのでしょうか？

（加藤会長）

私も疑問に思っています。途中で取り止めたり、こちらから取り止めてもらう事を伝える事はできないのでしょうか？

（市民協働部長）

規定はありませんが、共生ビジョンは5年間のうち、各事業が定めた期間の中で動いています。例えば八百津町の「野外フェスティバルからはじまるあたらしい地域コミュニティ事業」については、提案町である八百津町から「長い目で見させてほしい」との意見をいただいています。

もちろん、ビジョンは毎年見直していくので、その際にそれぞれ判断していくこととしています。東白川村の「R41 カード事業」は、既に提案村からの申し出で廃止していますし、川辺町の「ポート王国プロジェクト事業」については、川辺町から実施団体への支援を見直し、来年度からはゼロ予算で進めて行くとの話を聞いています。

(事務局)

こちらから取り止めてほしいというのは、正直に申しますと、事務局側からは言いにくい部分があります。それは、これらの事業提案は、各市町村を代表する事業として提案していただいた事業であるので、中心市とはいえ、決断することが難しい現状です。

(市民協働部長)

私は、立場は違いますが、第2次共生ビジョンは企画当初から関わっています。しかし、先ほど話に挙げた七宗町の事業に対しても、企画の段階から七宗町とかなりの応酬がありました。七宗町としても、町を代表して持ってきた事業であるので、絶対に実施したいとの意見でした。私たちもその意義について再三議論を重ねて参りましたが、町村の意向を酌まなければならないということになり、採択に至ったという経緯があります。

(岸田委員)

しかしその事業と定住がどうつながるかが今でもまだ分からないことが、問題なのではないでしょうか。だから、定住自立圏というテーマで実施するにふさわしいかどうか、どこで判断すれば良いのかという疑問が最後まで残ってしまうのだと思います。

(加藤会長)

第2次共生ビジョンの基本方針を整理しましょう。方針は3つあって、1つは都市圏とのつながりにより、定住人口の増加につなげるとあります。都市圏というキーワードがありますが、最終的には定住人口につなげるということですね。2つ目に、民間の力による新しい公共を実現し…とあり、これはどちらかというと圏域のボトムアップを、民間を巻き込んで行うという目的。そして3つめというのが、周辺市町村からの提案ということで、この3つ目の方針が現在の15事業ということですよ？

(事務局)

はい。町村から提案を受けたもの、美濃加茂市から提案したものを、重点事業として実施しています。当初は16事業ありましたが、「R41 カード事業」が廃止になったので、現在は15事業です。

この15事業すべてが、「都市圏とのつながり」「新しい公共」のいずれか、または両方に当て嵌まっているという状態で、事業化されています。

(加藤会長)

1つ感じたのは、「都市圏とのつながり」と「新しい公共」というのは、それ自体が目的ではないので、先ほどの林委員の意見のように最終的なフェーズによって段階を踏むのが良いと思うのですが…。今の方針を見ると、基本方針が大雑把で、その事業が方針に含まれているのか含まれていないのかという、判別に迷うように感じます。

(事務局)

もともと、「都市圏とのつながり」「新しい公共」というテーマで何ができるかという問いで、各市町村から挙げていただいた事業です。交流人口を増やすということだけで止まってしまっているように見える事業があるということですね。

(岸田委員)

この方針からすれば、七宗町の事業も「新しい公共」に当てはまりそうですね。

(加藤会長)

同意します。この方針があるために、逆に曖昧になっているように思います。

(岸田委員)

そうですね。定住自立圏であることと、基本方針がすぐに結びついていないように思います。

(加藤会長)

間違いではないですけど、これでは、やらないよりやった方が良いという感覚になります。

(市民協働部長)

これは、第3次共生ビジョン策定に向けた参考として、聞いていただきたいのですが…。

今の第2次共生ビジョンで、町村からの提案を受け入れようという経緯になったのは、第1次共生ビジョンで5年間事業を進捗した課程にあります。第1次共生ビジョンでは、医療や福祉、事務の効率化等、加茂郡広域化を目指して美濃加茂市が中心となって事業を進めてきました。ところが、行政間の話であるのですが、美濃加茂市が事務を一身に引き受けることとなり、町村はお金さえ出せば、あとは美濃加茂市がやってくれるという雰囲気になってしまったのです。

しかしそれでは自立にはなりません。だから各市町村が独自に事業を持って、事務を含めて進めてくださいという経緯で、町村からの提案を基本方針に含めたのです。

とはいえ、あくまでも定住自立圏の目標は、定住人口を増やすということを大前提としています。定住人口の増加というのはすなわち、都市圏からの移住者を含むことであり、官民間わす圏域全体が一緒に取り組むという目標を掲げるため、「都市圏とのつながり」「新しい公共」という方針を入れました。

町村にとって、自分で提案して事業を進めて行くことは、今回がはじめてのことでもあります。ですので、自分たちがやりたい事業をやってしまうというのが、確かに弱点ではあると思っています。

※市長 到着

(市民協働部長)

お待たせして申し訳ございませんでした。それでは市長より、本会に関してごあいさつをお願いします。

(市長)

急なこととはいえ、慌ただしくなってしまう、申し訳ございませんでした。

定住自立圏は、第1次共生ビジョンを始めたころ、職員として関わっておりました。第2次共生ビジョンについても、皆様のお力添えでスタートをはじめたことをしっかりと覚えています。

私に関わってきたころから、およそ10年の月日が流れました。感慨深さを感じると共に、今回市長という立場になって、定住自立圏の大切さを感じています。反面、住民の皆さんが、どこまでこの事業に理解や誇りを感じている事業になっているのか、少し検討する必要があると思っています。

第3次共生ビジョンに向けて、自信を持って住民の皆さんに「定住自立圏をしっかりやっていく」と言えるように、進めて行きたいと思っています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

※事務局がこれまでの意見を市長に説明。時間となり、前半終了。休憩をはさみ、後半の議論へ

(加藤会長)

では、後半は市長と共に、今後の展望について意見交換をしていきます。

まず、前半の意見交換によって、課題がいくつか見えてきました。例えば、事業フェーズや、ターゲットの設定、KPI の再設定などのように、課題の整理をしていった方が良いと思います。また、新しい事業が出てこないことも 1 つの課題であると思います。それらを踏まえ、今後どのように展開していくか、皆さんから意見をいただければと思います。

(慎康氏)

私から意見を申し上げても良いでしょうか。

私は立場上、たくさんの人を連れて地域を歩いているのですが、その際感じたこととしては、この圏域は素材もあり、とてもすごいポテンシャル（存在的な力）があると感じています。

しかし、それを生かし切れていないのだとも感じます。それはおそらく、テーマが繋ぎきれていないからだと思います。単騎でやっていることにしても、運営する団体自体の選別にしても、テーマを繋げられていないので、情報発信も弱くなってしまふのだと思います。そこをもう少しコントロール出来たら良くなると思います。

強いて言うならば、せっかく私が美濃加茂市にいるのに、動けないのが勿体ないと自分自身で感じています。もう少し、圏域を回る時間を貰うことができれば、私はもともと名古屋圏とつながりありますので、圏域と両者をつなげやすくなるのかなと感じます。

(加藤会長)

具体的に回りたい場所があるのですか？

(慎康氏)

定住の事業というよりは、個々の市町村はそれぞれ動いているので…例えば七宗町では、新しい移住体験ハウスがあるので活用状況をお尋ねしたいですし、東白川村では農業生産者がつながりを持って農業をやっているのを、それを売り出していきたいですし、白川町では有機農業の取り組みが盛んで、全国に誇れるレベルとなっています。これこそ新しい公共の分野なので、もう少し名古屋圏と繋ぎやすくなれたらと感じています。

有機農業と言えば、移住して農家になった人たちが所帯を持って子どもが生まれたと聞きました。白川町だけで 30 名くらい、移住者が居るそうです。その子供たちがまた何年もすれば高校生になり、通学の問題が発生します。だから予測できることに関して、今の目線で早いうちに美濃加茂市の人口ダム機能を維持させる必要が出てきます。そういう人たちが安心して暮らしていけるような取り組みをすると、良い形になりそうです。このように美濃加茂市とつながって、農業をどれくらいの規模で実施していくか、子どもたちの通学をどう解消するかを考えていく事も、新しい公共のパターンに繋がりがやすくなると思います。それこそ、その恩恵を感じることが出来れば、本当に「定住」というものにつながると思うのです。

(加藤会長)

この圏域にはポテンシャルがあるけどテーマが繋がっていないので、自身がコーディネーターとなって圏域を回ることを含め、つなげていけると良いとのことですね。

それでは次は林委員。先ほど、『私が話すことは 3 つに尽きる』とのご意見でしたが、いかがでしょう。

(林委員)

そうですね…。本日、私が言いたい事は、先ほど申し上げたように事業フェーズと KPI です。まずはこの KPI 設定を、適切に各事業が設定していく事が大切だと思います。

この圏域に関わって 2 ～ 3 年が経ち、率直に感じたことは、人材のクオリティがピンキリであるということです。これはどの地方に行っても付いてくる課題ではありますが、みのかも定住自立圏事業においても、事業によって人材のクオリティの差を感じます。で

すので、主催者側となる自治体がそこを精査することが必要だと思います。民間の事業者が自分たちのやりたいことしか実施しないというのは、性質上仕方ないと思います。言ってしまうと、行政の金を使って自分の都合の良い事をやりたいと思うのは、民間の心理だと思います。だからそれをうまく行政の目的に結び付けてあげるといのが、行政の腕の見せ所と言えます。例えば、「あなた方の事業は第3フェーズにあたるので、もう少し中身をこしたほうがよい」「この事業はこのように活かさないでしょうか」など、うまくアドバイスをして、行政側から意見を出すべきだと思います。

また、全体に言えることとして、事業の参加者の年齢層が気になります。定住自立圏の最終的な目的は、自立して生き残っていく地域という点に尽きるかと思うのですが、20代30代の参加なくしてその話を論じること自体が、すでに的外れな感じがします。

無論、福祉や医療は、その立場にならなければ分からないことですので、そういったことに対しては、年配者やその立場の人が積極的に動いていくべきだと思うのですが、第2次共生ビジョンは全般的に「知って」「関心を持って」「アクションを起こして」もらうというフェーズがほとんどで、そういった要素はどちらかというと、これからの世代が「どんな地域にしていきたい」と願うニーズが反映されなければならないことです。であるにもかかわらず、若い方の顔が見えないのは非常に残念に思います。例えば、プロポーザルを行う時、事業体に対して「参加してもらう時に例えば必ず20代の参加者を入れる」とか、「行政職員でも民間職員でも良いので30代の人を加えてもらう」などという話を汲み取れないのかなと思うことはあります。

私は特に、委員の中で唯一東京都に住んでいて、この地域の実態を知らない人間なので、良くも悪くも客観的に見えてしまう事が多くあります。

今の世の中は、すごいスピードで動いています。人工知能、ロボット技術の向上によって、数年後には今ある仕事が失われてしまうと言われる時代です。首都圏では実際に、様々なことがスピードアップして進んでいて、メガ企業や銀行もすごい勢いで大幅なりストラを行っています。そんな世の中の動きと、この圏域で取り組もうとしている流れが結びついていないように思うのです。

先日、仮想通貨がニュースの話題になったことがありますが、バーチャルの世界が急速に巨大化しています。これはどういうことを意味するかと言うと、GDPは成長しているが、実体経済は成長していないことであり、その膨らみはオンラインの世界にあるということなのです。

そんなすごい世界は一部だけであることは分かっていますが、その感覚と圏域を直接的に結びつけることに関しては意識を持った方が良いと思います。ハードルは高いかもしれませんが、デジタルの感覚は今の10代20代がとてもよく分かっている世代ですので、そういった世代の意見をうまく取り入れていくことが鍵となると思います。特にPRに関しては、20代…場合によっては10代も含めて、意見を取り入れた方が良いと思いました。

(加藤会長)

ありがとうございます。フェーズとKPIの他に、デジタルの部分について意見がありました。

では次に岸田委員、お願いします。

(岸田委員)

さきほど、評価軸の話をしました。改めて考えてみた結果、少し意見を変えたいと思います。

私たちが評価軸を提示するというのは、今の段階からはとても難しいと思っています。ですので、むしろ事業を実施する側が、何を評価してほしいかについて、明示していただくという方が上手いかなと思います。自分たちが目指すこと＝評価してほしいことを出していくことで、我々も実施内容が評価軸と適合しているかどうかの判断がしやすくなると思います。

事業全体をどういう方向に向けて進めて行くのかを含め、自分たちが見てほしい、評価してほしいと思うことや、こういった状況にたどり着けば成果として判断する、という自分たちの基準について、改めて実施主体側が提示してもらう方が良いと思いました。

もう1点は、この事業の共同性についてです。これらの事業は、美濃加茂市と町村、そして地域団体との共同であると思います。しかし、お互いに「共同」について理解できていないように思います。共同とは、事業としてどちらが主導権を握るかではなく、この事業を実施するために、それぞれが「何が足りない」と感じていて、「どんなことなら提供できる」という、強みと弱みを出しな

がら進めて行くことです。それはお金だけではなく、人、時間を含めた資源をどう投入できるかということであって、これらの強みと弱みを最初に提示しておく、共同として成り立つ方向性が見えて来るのだと思います。今からでも遅くないので、少なくともこれはやっておいた方が良いと思います。

(高島委員)

皆さんの話を聞いていて思うことが1つあります。

この第2次共生ビジョンは、残すところあと2年の期間しかありません。3年後には第3次共生ビジョンはやって来るわけで、第3次共生ビジョンは、市町村といろんなことを一緒に考えていくことになるかと思っているのですが、その第3次につなげるために、第2次共生ビジョンの終着点をどうやって定めていくかを、最初に決めていく必要があると思います。

私も林委員の言うように、KPIやフェーズの話には思う所があります。以前、実施主体者を集めてフェーズを共有しましたが、的が外れているように思えてならないものがありました。だから、事務局や委員会がKPIはここまで必要であるとか、この指標の中でこうすることが最低ラインであるとかを決めてしまって、あとは事業主体側で考えていきましょうという絞ったお願いをした方が早いように思います。

同じように、フェーズに関しても、本来は①なのに③と提示する事業主体者もいたので、この事業はこのフェーズであるので、このラインまでのKPIを設定してほしいということ、しっかりと指示してしまっても良いのではないのでしょうか。その上で、行政からの要望と事業の内容、やりたいこととこのビジョンの目的とを合致させていくという手法があっても良いと思います。

連携に関しても、定住事業全体のプロジェクトをつなげていくために、具体的に連携してほしい事業を挙げたり、一度協議してもらおうよう指示することも必要なのではないのでしょうか。それぞれで連携してほしいと指示をしたところで、当事者に具体的なイメージが沸かないからこそ、こういった具体的なアドバイスを落とし込んでいった方が、事業主体側もやりやすいのではと感じます。

(加藤会長)

行政側から指示をする事、それも、行政目的との結び付けまで介入した方が早いのではないか、という意見でした。

市長はいかがですか？

(市長)

あくまでも私個人の考えなので、間違っているかもしれませんが…。

定住自立圏とは、「定住」と「自立」の2つの意味から成り立つ言葉で、「定住」とはここに住みたいという意思があること、「自立」とはそれを支える何らかの経済や生活の基本が成り立つことということで、その2つについて取り組むものだと思っています。

職員として第1次共生ビジョンに関わっていましたが、今思えば大きな反省点がありました。それは、首長方や委員会の皆さんを含めた様々な人と、定住自立圏事業を動かすための、10年後のビジョンを共有できていなかったということです。私も部長も、加藤会長も、10年後に何がどうなっていればよいのかという思いは、きっと少しずつ違っているはずなのです。何となく事業をやって盛り上がれば良いという雰囲気もありましたし、もしかしたら進めた事業に対して不満を感じた人もいたでしょう。

だから第3次共生ビジョンでは、皆さんの言われる通り、目標をはっきりさせるということに注視したいと思っています。定住というのは、この地域に誇りを持って生きていきたいのだという気持ちを、みんなで持つことであり、私は10年後の将来がどこに向かっているのかをみんなで共有したいのです。例えば、「みんなが元気に暮らす」というのは抽象的で逆に分かり難い。だから、「10年後の将来を絵に描いてほしい」という問いを皆さんに投げかけた時、「子どもたちがこうなっている」と描く人もいれば、「おじさんがこうなっている」と描く人もいます。もしかしたら絵なんか描けないと言う人もいるかもしれません。具体的に絵にすることで、ターゲットも変わってくるかと思っています。

先ほどAIの話題が出ましたが、委員の皆さんを含め、皆さんと意見を言い合うことで、様々な切り口が見えてきます。だから、「10年度はこんな世界になったらいいね」というビジョンをお尋ねし、明らかとなった目標に向かってターゲットが明確になっていけば、そのために必要な事業はこの事業である、というのを住民の皆さんにも理解されやすくなると思っています。ですので、私はイメー

ジの共有を、今後はしっかりやりたいと思っています。

(加藤会長)

10年後のイメージの共有を、みんなで行うのですね。

(市長)

はい。価値観を含めて、になりますが。

加えて、先ほど林委員が言われたように、若い人の参加は、絶対条件だと思っています。例えば里山を綺麗にしようという活動に対しても、60代の想いと、20代の想いでは差があると思います。これから生きていく人がやりたいと思うビジョンを持っていかなければ続かないと思います。例えば里山にかかわる年配の方からは「昔はこの山でこんなことをやっていた」という話を良く聞くのに、子どもたちからは「この山ではこんなことができる」という話を聞かないので、若い世代をどんどん巻き込み、「あなたならどうする？」と投げかけ、一緒に取り組んでいけたらと思っています。きっとそれは、10年後の目標につながるかもしれません。

(慎康氏)

以前、地方創生の管轄でリーサスのワークショップをやっていて、私も参加したのですが、美濃加茂市の分析をした結果、2040年を超えても、美濃加茂市は人口が増えるという算出になっていました。しかし一方で、圏域全体としては、人口は減ってしまうので、そういう視点で考え方を変えていく必要が出てくると思います。

そのためには、生業を育てていく事が大切だと思います。生業を作り、若手を作ると同時に、都市圏から落とされたお金を、地域の内部でどう循環させるかということも、戦略的に考えていく必要があると思っています。しかし、先ほど林委員の言うように、今の圏域はその「戦略的」にはなっていないと思います。それは、やりたいことをやっているという点が理由であり、確かに地域経済は回っているかもしれませんが、それだけでは少し勿体ないように思います。だから、もう少し活かしたお金で、若手が活躍できるように循環させるべきなのだと感じます。

(市長)

1つ、皆さんに聞いていただきたい話があります。

今、美濃加茂市では、新庁舎建設にかかわる話し合いを進めています。今の庁舎は耐震年数も含めかなり危なくなっており、早急に建て替えるという前提で進んでいるのですが、私たち行政の間は「新庁舎をどうしたらよいですか」と問われた時、「5階建てか10階建てが良い」とか「土地や面積を考慮すると、必要な面積は〇〇平米であるから…」という形に拘った話になります。ところが、今年1年間、市民の皆さんを巻き込んで、どんな街づくりがしたいかという話を聞いてみると、「10年後の市役所ってどうなっているんだろう」という話題が出てきました。きっと、10年後の市役所では、紙ベースで何かを証明することが無くなり、住民票を窓口で発行していないかもしれません。新築するのではなくどこかを間借りするなど、お金をかける必要もないという意見もあり、市役所という名前の建物ではあるけれど、今の形ではないだろうということが分かりました。では、窓口がなくなる代わりに、10年後に必要な市役所のスペースとは一体何だろうと色々な人に聞いたところ、空いたスペースには、自分たちが使いたいスペースを入れたいという話がありました。そのスペースは、「今日、時間があるから立ち寄ろうよ」と市民が自由に使えるスペースで、10年後の市役所は気軽に立ち寄れる場所というイメージだったのです。このように、私たちが想像している将来像とは全く違ったイメージを持った人が、たくさんいることを学ばせて頂きました。

同じように、定住自立圏の取り組みに対しても、将来のイメージを共有することが出来れば、それに向かってみんなでエネルギーを出し合うことが出来ると思っています。新庁舎建設と定住自立圏の取り組みという差はあると思いますが、気持ちの持って行き方としては、こういう手法もあるのではないかと思います。

(岸田委員)

新庁舎建設の話に参加した市民の方は、どれくらいいるのですか？

(市長)

最初に、住民を対象としたアンケートを行い、1,000人くらいから意見を貰いました。そのアンケートをベースにして、1年間で数回のワークショップを行いました。1回20名程度で、のべ500人くらいに参加してもらうことができました。ワークショップと言っても、子どもを持つ女性、外国籍の住民、障がい者、企業、高齢者など、参加者を限定した状態で会を開きました。少ない時は10名だけでしたが、参加した人から強い想いや意見をいただくことができ、模造紙にたくさんの付箋が並びました。

この意見をまとめるとき、絵をかくのが上手な人が絵に表現してくれたのですが、描いた絵に対して別の意見が出てきて、絵を描き直し、それに対して意見が…というのを繰り返した結果、皆さんが求める姿はこれだ、という絵が完成しました。

(岸田委員)

違う立場の人同士の意見をまとめるとき、対立する意見は、必ずあったと思います。

(市長)

そうですね。建設場所に関しては、今後、場所を決定する段階から意見が出てくると思います。戦争になってしまうことは避けたいものですので、ワークショップでは合わせて建設場所についても話し合いました。結果、4か所出てきたのですが、これを候補地の1つとして考えています。

(岸田委員)

今の話のように、1つのものをどう作り上げたいのかをみんなで共有することは、定住自立圏の取り組みにおいても、かなり大切なことだと思います。おそらく、同じテーマでも市と村では全然違うことでしょう。対立する意見を含めてどういう案を選んでいくかを、共有と話し合いによって見つけ出していく。そのプロセスが大事なのだと思います。

(市長)

そうですね。この話は企業の人にも入ってもらっていたのですが、彼らの主張としては、自分たちの将来像の中に当然ビジネスとしての視点が入っていました。当然、儲からなければ会社として成り立たないので、彼らからすれば当然の話です。しかし、いち従業員の視点もすごく大切にされていて、例えば従業員が終業後に汗を流せる場所があったら良いなど、儲けることが前提ではあるけれど、別の目線を考えているという会社があることを知りました。

このような形で、皆さんの最大公約数が見つかるの良いなと感じます。

(岸田委員)

それぞれのステークホルダー（利害関係）が、それぞれで出来ていると感じます。今の話は、定住自立圏の取り組みにもかなり通用するかと思いました。

あと、少し気になりましたが、私は今の話は最大公約数ではないと思います。最大公約数であるなら、もっと小さく丸くなってしまうので、ビジョンにならないように思います。

(市長)

はい、そうですね。行政用語…と言いますか。行政的には、丸く収めたいところではあります。ビジョンであればもう少しトゲトゲしていなければいけませんね。

(高嶋委員)

今の話は「本来はどうあるべきか」という話ですよね。その意味で、失礼な言い方もかもしれませんが、今の第2次共生ビジョンは、その理想と少し乖離している事業があります。その事実をどうやって本来あるべき姿に近づけていくかということが、問題提起になると思います。残り短い期間の中で、今年はどうしていくのか、第2次共生ビジョンをどうしていくのかという話をぐっと進めることが出来れば、本来あるべき姿に近づけられると思うのです。

(市長)

おっしゃる通りだと思います。

実は今、まだ全ての町村長と話が出来ていませんが、各自治体の首長方と1時間程度の短い中で、定住自立圏のこれまでとこれからについて話をしています。首長方は本当にいろんな意見を持っていて、やりたいことや、もうやめてみたいものについて正直な話をしています。そういう話を進めて行けば、時間はかかるかもしれませんが目指すものははっきりしますし、今やっている事業がそれに反しているなら、第2次共生ビジョンという位置づけで、KPIも含めて結論が出せるのではないかと考えます。

(加藤会長)

私も高嶋委員の言うことに賛成します。市長が言ったように、大きなビジョンをどの段階から共有するかということと、第2次共生ビジョンをどう終わらせるかということは、まったく違うベクトルだと思うのです。

今のビジョンを終わらせる方法としては、まず今の事業がどんなフェーズであるかを明らかにすることで、KPIを再設定し、そこに向けて終点を明らかにすることであると思います。これは確実にやらなければならないと思います。その時に、事務局や担当の皆さんとの飲み会（気軽に話せる場）を並行して出来ると良いと思います。

一方で、先ほど慎康氏が、コーディネーターとしてそこに介入するという提案をされましたが、つっこんで関わっていく事があってもよいのではないかと考えます。例えば、レッキーマラソン（レッキーマラソンコース沿いの環境整備事業）をやっている事業者さんたちに、フェーズはいくつですかと選べさせるよりも、「〇〇事業はフェーズ1なので、このように頑張ったらフェーズ2になります」という話をした方が建設的ですし、KPIに関してもこちらから提示した方が早いと思います。同じように、かなり乖離してしまっているかもしれない事業に対しても、本来の目的や「新しい公共」「都市圏とのつながり」に近づけるために必要な事を助言して、示唆していく事が必要になると思いました。ここまでは第2次共生ビジョンを、どう終わらせていくかに必要なことだと思います。

そして今後の話も同時に進めることが必要で、今のビジョンがあと2年間あるからこそ、第3次をどうはじめるかについて考えていく必要があります。先ほど市長が言われたように10年後はどういう未来になっているか…今から考えるなら12年後の未来について、12年後を目指してみんなで考える場…たとえばフューチャーセッション等を、圏域という括りを越えて実施することも良いと思うのです。それはサーキット方式で1自治体ごとに順繰りに開催してもいいし、一堂に会しても良いと思います。めぐりめぐって最後に、うちの自治体はこうだったと競わせるのも面白いと思います。そうすれば、市町村がそれぞれで描いた圏域全体の10年後の姿の差が見えてきて、それをもとに10年後のゴールを描けるのだと思います。その時に、今までに関わっていない若い世代（30代～40代）を巻き込むことで、新しいビジョンが描けるのではないのでしょうか。

既存の事業に、若い人を入れ込んでうまくなじまないのは、言われたことに踊らされるのは嫌だと思える人が結構いるからで、人間の心理的にもやりたい事が優先になると思います。だから、「To Do（しなければならない）」にさせない工夫、「Want To（やりたい）」にさせる工夫が必要です。フューチャーセッション等に参加してくれる人は、そう思ってくれる人が集まってくるので、そのためのフライヤー（チラシ）や呼びかけを工夫し、「大人になんか未来を任せておけないよね」「私たちがほしいものを作ろう、私たちが未来を変えるんだ」と先導して、若い世代を集めても良いのではないかと考えます。

一方、今の課題として、第2次共生ビジョンの募集の仕方が、先ほどの「To Do」と言いますか…美濃加茂市から各町村へのお願いから始まっていることが、そもその間違いだと思うのです。お願い（Ask）をした時点で、それに応える＝やらされるということになります。やりたいことではないので、そういう「オファーして応えた」という関係は、絶対に変えられません。

だから、第3次では自分たちが応募したいと思う人、そういうモチベーションがある人を集めなければならないと思います。その意味で、一度全部リセットして再スタートするくらいの勢いで良いのではないのでしょうか。

例えば、里山や環境関係の活動に関われる人は、特定の団体だけでないと思うのです。以前関わった活動の中に、「五条川をテーマにどんなことができるのか」という集まりがあって、2市3町で開催する会議があります。活動も3年目となり、そろそろ実際に動いてみようということになって、市町村関係なく動き始めた事業があります。このように、テーマをあらかじめ与えた状態で集まってもらおうし、市町村を越えて人が集まってくるし、今まで関わっていない人を掘り起こすことにもつながります。そうしないと、ずっと同じところにお金を流し続けることにもつながってしまうでしょう。ただ、あまり広げすぎても收拾がつかなくなってしまうので、今年は環境と福祉の2つのテーマで実施する等、ある程度絞って開催できると良いと思います。

やはり、キーワードとしては「当事者化」なのだと感じます。

先ほど市長から教えていただいた新庁舎の話も、市民が庁舎に対して「自分事」として本気で考えてくれたから、10年後の市庁舎について、そもそも庁舎が存在しているか？ という議論が出来たのだと思います。こういった、当事者になってもらう努力をしていかなければならないと感じます。

一方で、そのためのコーディネート能力や介入する能力を付けるための工夫を、両立して実施しなければいけないように思いました。

(市長)

たしかに、自分自身に置き換えてみても、漠然と「定住をやりましょう」というよりも、「山・川をテーマに考えよう」とか「歩くことをテーマに考えよう」などと、テーマを絞ることでみんなのそれぞれの思いが分かりやすくなると感じました。そして、今の話を聞いて、それが今まで無かったと思います。

今、定住自立圏では30近く事業を進めていて、関わる団体の皆さんは、それぞれすごい汗をかいて進めてくださっています。結果が見えて来ないので批判もあるかもしれませんが、そういう人たちは決してそういった「やりたい」という思いが無いわけではないと思うのです。だから、そもそもなんでやりたかったのかと聞いた時に、「川を綺麗にしたかったんだ」という答えが出てくる事業があると思います。細かく言えば、そんな思いが無くても出来てしまった部分もあるかもしれませんが、だからこそ今実施している事業は、最後までやりきったことを思っていたきたいと思っています。おっしゃるとおり、ランディング（着陸）の仕方を含め、テーマを絞って考えて、コーディネーターから助言を受けた時に、「そうそう、そういうことが言いたかったんだ」と頷いてもらう事ができたら、お互いに達成感が生まれて、第3次共生ビジョンにつながっていけるのではないかと、そう思うのです。

(加藤会長)

(イラストを描きながら) 今は、美濃加茂市と町村合わせて8つの自治体があり、それぞれ事業が提案されていますね。その上で、美濃加茂市はすべての町村と連携していなければならないという縛りがありますが、原則、市町村同士で連携するという形を取っています。

こういう縛りではなく、例えば「里山」というテーマを先に決めて、そのテーマに参加してきた市町村同士で集まって連携を取った方が、結びつきやすくなります。この方が新たな事業が生まれやすくなりますし、そのテーマに関心のある人が年代問わず一定数いるので、下からあげていって無理につなげるよりも、横串を先に入れて集まってもらった方が、効率よく進められると思います。

それで、テーマごとに慎康さんや…企業なら高嶋さん、共同なら岸田さんというように、テーマ毎のコーディネーターを配ることができたら、後ろからサポートでき、新しい第3次共生ビジョンが生まれるかもしれません。

(高嶋委員)

地域に住んでいる人が自ら動き出すことに対しては、そういった細かなテーマ設定は有効だと私も思います。

しかし、今の話を聞いて、「私がこの地域に移り住むなら？」と考えた時、違和感を覚えました。例えば里山を皆できれいにしようという活動があったとき、私がそれに魅力を感じて移り住みたいかと問われたら、「いえ、働きたい」と思います。だから、『里山をどうしたいかと言いつつ街に住めるだろうか』という観点になってしまうと思います。そういったときに、先ほど慎康さんが話していた「有機農業が盛んだから白川町に移り住んでいる」という人がいるように、農業をやりたい人、働きながら住みたい人、子

育てを中心に住みたい人、というように、設定するテーマはプロダクトアウト（作り手が作りたいものを作る）というか、移り住みたい人がこの街なら住みたいというテーマで区切り、その中で集まった人たちが話し合っ、この街なら住めるという設定をしていった方が、「この街なら働きながら住めそう」とか「この街とこの街のどちらがいいんだろう」と選ぶ事も出来ますし、いろんな立場の人が移り住みやすい様に思います。

（慎康氏）

制度設定も必要だと思います。この流れの中で課題と思うのは、プレイヤーがいけない事になると思います。長い目でプレイヤーを育てていく制度を作らないと、成り手がなくなってしまいます。例えば小さな事業提案があって、それを第3次の途中から実施できるように、採択できる仕組みがあれば良いと思いました。市単体ではなく、横断的に動ける人を含め、その形態を含めて制度や仕組みを作る必要があるように思いました。

（市長）

私が職員として関わっていた頃、Sony という会社の職員と、定住自立圏について意見交換をする機会がありました。「この事業は国が止めても続けるのが前提ですよね？」と尋ねられた時、どきとした覚えがあります。その時、激論したのが「エンジン」という話題で、「この事業にはエンジンが必須条件で、エンジンとはプレイヤー、財源、場所…さまざまな事を指すが、そのエンジンとはなんであるのか？ 管理する組織が絶対に必要である」と言われたのが印象的でした。

行政が決めてやるだけでは、良い案をもらっても、議会では否定的に問われてしまうこともあり、実現まで持って行くエンジン部分が、行政以外にあっても良いのではないかと思いました。

（加藤会長）

移住者の視点や新しい視点…たとえば「働きながら暮らしたい」という視点は大切ですが、今の事業のボトムアップにしても、テーマ方で区切ろうとしても、地域の理解はとても難しい課題だと思います。10年後のビジョンに近づけるにはどうしたらよいかを考えると、新規でお試し（トライアル）した方が良い案が出てくるかと思ひます。

（岸田委員）

私もそう思ひます。公共交通なども出てくるかと思ひます。

（加藤会長）

ええ。だから、ボトムアップ型はテーマ毎に呼びかけて実施していくことをしつつ、新しい未来に向かってどうしたら欲しい未来に手が届くのかを考えるエンジンを作る必要があります。そしてそのエンジンは、そういう仕掛けをこちらから呼びかけないと生まれてきません。

今の事業における団体の人たちに、いくらそれを言ったところで、やっぱり自分たちの活動ベースの延長でしか考えないので、描いてほしい未来も描けないし、そんな中に若い世代が入ったところで、たぶん「つまらない」と思ひてしまいます。

（岸田委員）

そうですね。とはいっても、彼らは彼らで歴史を知っているので、この圏域全体を見通して、歴史をつながげながら定住する人たちを増やすという視点から考えていくべきだと思います。

いろんな視点を持ち、若い人は勿論入ってもらわなければいけません、未来が描けないからと彼らを排除するのではなく、彼らにとって大切だと思ひている大きな要素を取り入れながらも、進めていく事は良いことだと思います。

（加藤会長）

それならば、巻き込むターゲットも分けて考えた方が良いですね。呼びかける対象が既存団体であることと、移住や『この街をもっと良くしたい』と思っている若い世代に呼びかけることでは、やはりアウトプットも違ってくると思います。

(市長)

少し話が呼びますが、美濃加茂市には坪内逍遥という偉人がおりまして、その話題を聞いていただきたいのですが…。

美濃加茂市では「M-1 検定」といって当地検定があり、『美濃加茂市は〇〇である、〇か×か?』という感じで出題する天才クイズのような企画で、つい先日、イベントを開催しました。非常に面白く盛り上がりまして、次回のテーマを坪内逍遥にしようという話が出てきました。美濃加茂市には「坪内逍遥博士顕彰会」という団体があり、平均年齢70歳くらいのメンバーで構成されていまして、問題を出すなら私たちに任せなさいという方々がいらっしゃいます。一方、早稲田大学の学生さんの中にも、坪内逍遥を良く知っている方々がいるのです。それで次回やりたいと思ったのが、この「顕彰会 対 早稲田大学」にしたかどうか、という話題でした。

だから先ほどの話では無いけれど、里山というテーマで話し合っ「私たち10代は里山についてこんな風にしてみた」、「私たち70代はこれが里山の原点である」というように、違うプレイヤーとして同じテーマで話し合ってみて、どういう手段があってどれくらい違うのかということをはっきりとすることはありかもしれない、と思った次第です。

(慎康氏)

今年度、岐阜県が移住に対する意識調査を実施していて、その中には「私はこの場所に住めるのだろうか?」という内発的な部分の理解とその上での情報提供が大事であることがわかりました。私は、そういうものが圏域の中で出来ていないと感じています。例えば、「この地域なら〇〇が出来ます」とか「〇〇したいなら東白川村が素敵ですよ」とか、「〇〇ではこんなことがはじまっています」等、こういった情報を整えて出すところが無いと思います。

移住して来ても戻ってしまう事もあるので、やはり中間でコーディネートできる人が重要だと思います。

(加藤会長)

情報を絞って出せると良いですね。今の時代、「けっこう通勤も便利だし、育児もこうで…」という、あれもこれも出来るというのは、どこの市町村も謳い文句にしています。そうではなくて、慎康氏の言うとおりの「有機農法をするなら〇〇」「パン屋をやるなら〇〇」というくらいの情報提供が必要なのではないでしょうか。…行政として、特定の的に絞ったやり方は難しいかもしれませんが。

(市長)

いいえ、私はそういう尖ったやり方は絶対に必要だと思います。棘が無いと刺さりません。円ではツルツルで続かないのです。

(慎康氏)

奈良県の奥大和の地域ではテーマが作りこまれていて、「このエリアは木材系だから「木」をもっと展開させる」「地域全体で考えるとこの場所はこうだろう」というように、このテーマに沿って情報発信する人が移住してくる取り組みがされています。

現状を見ると、自治体同士はお互いに移住者を取り合いしないように動いている節があるので、そこはもっと色分けをして、「〇〇町さんはもっと〇〇を押し進めていけるはずですよ」というように、お互いに言い合える関係があればいいと思います。そうすれば、定住自立圏は合併じゃないので、全部の市町村がちゃんとイメージを出せるようになります。

以前、「食べる通信リーグ」の高橋さんの講演会がありましたが、この取り組みで食材や文化が本当に根付いているので、発信することができたら名古屋圏の人たちは絶対に支持してくれるはずですよ。…ふと思いましたが、こういった情報を買ってくれる名古屋圏の人や全国の興味がある人達を含めて、まとめて会議をすることはどうでしょうか。こういう人たちと一緒に、オンラインでもいいので、この地域をどうやっていくかを考えていく事ができたらすごく良い取り組みになります。そうすれば、木曽川水系でつなが

っているエリアとも連携が出来るようになります。

※残り時間となり、一言ずつ。

(林委員)

今日はとてもレベルの高い話で勉強になった半面、脳がフル回転しており、ちょっと飛んでしまっている部分もありますが…。市長の「10年後の姿がすべての基盤になる」という発言が、今日一番響いたフレーズでした。確かに10年後の市庁舎はどうなっているのだろうと考えが移り、考えてみた結果思ったのは、先ほどのテーマやターゲットの話にも重なるかもしれませんが、つまるところ行政機関に求められるのは、テーマと課題設定とコーディネーション…ディレクターのような仕事に集約されるのかなと思いました。それが全ての考え方の基本になっていくのかもしれませんが。その仮説のもとでシチュエーションを考えると、いろんな人が気軽に入っていきたくなるような空間で…まさに今いる「あまの森」みたいな施設なのかもしれません。ここはとても良い施設ですよ。学生が気軽に勉強しに来るのは、きっと心地がいいからだと思うのですが、今後庁舎として必要となるのは、開かれたハードであるべきなのでしょう。

あとは、社会のキーワードとして「美容と健康」「移民外国人」「高齢者」が議題に上るかと思いますが、「民間委託の行政機能」となっていくことや、A I（人工知能）やI O T（モノとインターネットを繋ぐ仕組み）を考慮すると、社会全体がクラウド型になっていくのだと思います。例えば近未来においては、「美濃加茂市の市制でこんなことが不満でした」という意見が、コンビニやiPhoneから集約されて美濃加茂市の中央センターに溜まり、それが場合によっては民主主義的に「私もそれを思った」や「Yes」という意見がさらに集まり、最終的に『三十何パーセントの人が〇〇について関心を持っています』という結果になって、市政の優先順位が付けられていく…という世界になっていくのかなと、皆さんの話を聞いて呆然と思いました。

最後に、もう1つ気になったものの私自身もアイデアが出せない話がありました。それは市長の言う「自立＝エンジン」という言葉は、率直に言えば「ビジネスモデルにせよ」ということなのですが、これは今の事業が補助金なしで稼げる事業設計をしているのかな、という意味でもあり、同時にこれは本当に難易度の高い話なのです。東京などの都市圏なら成立すると思うのですが、地方でこれができる事は相当レベルが高いことなので、私も明確に回答することが出来ないのですが、事業によって2種類の方角…ビジネスモデルを目指す事業と、利益は出ないけど地域に必要なことが当然あると思うので、それを補う事業という2種類にしっかり分けていく必要があるなと感じました。

(慎康氏)

今、別件で移住定住の美濃加茂市のHPの企画をしており、今年度中にオープンする予定で動いています。その時に出てきた話で面白かった話をご紹介します。それは、オープンガバメントを提示したいという話をしていて、行政なのか民間のページなのか分からないけれど、情報もコンテンツも市民主体で発信されて、もちろん噂話ではなく詳細な情報まで乗っているような、皆さんに届く機能をキチンと持ったものを作りたいという話でした。

何が良い対価というと、やはり情報発信と人を繋ぐ仕組みを定住自立圏の中でやれたら良いと私は感じていて、その背景には地域ベースで出てくるテーマは、「今」のことしか出てきていない感じですので、10年後の先を考えていけばA Iや新しい機能をもっと巻絡的に見ていかなければ、人も来ない。だから人とつなげていくことを第3次の部分で考えていけたらと思います。

今の第2次共生ビジョンは、いかに成功モデルをいくつか作るということが必要で、さっき言ったようにコーディネートできると良いなと思いました。

(高嶋委員)

第2次から第3次に向け、今、第2次に取り組む皆さんは第3次へバトンを渡すリレー走者なので、第3次にどう繋ぐかということが大切だと思います。その1つとして、どうやってゴールに近づけるかということも勿論重要ですが、主体者として定住自立圏事業に関わっていたからこそ、彼らの10年度や20年後を見据えられる機会になると良いなと感じました。

もう1つとしては、慎康氏の意見で出た、東京や名古屋のように外にいる人が会議等に入るとするのは面白いと思いました。ここに住んでいる人の話ではなく、「こういう街なら私は住みたい」という人の意見が形になったとき、彼らは必ずその町に住みたいという意識が高くなると思います。そういう巻き込みが出来ると、もっとその街に愛着を持って移住してくる人が増えてくるのではないのでしょうか。こういった取り組みは他ではやっていないと思うので、形に出来たら良いと思います。

(岸田委員)

テーマを何にするかといったときに、昔の「食う・寝る・遊ぶ」ではないですが、生活の基本が主になってきます。働くことは当然出て来なければいけませんし、今みたいな要素をどう取り入れながらテーマ化をしていくかを考えていく必要があると思います。

もう1つは、評価や共同の切り口で言うと、一緒にやって楽しかったという気持ちを私たちは「愉快度」と呼んでいるのですが、楽しいと思った中でお互いにどれだけ成長できたか、ということに着目したら良いと思います。経済的なことばかりではなく、自分たちの考え方が変わったことを含めて、どれだけ成長できたかが見えて来ると、お互いにやって良かったと思えると思います。定住とはまさにそういったことではないでしょうか。それぞれの地域が「やってよかったと思える中身は、一体どんなことだろうか？」ということだと思うので、個々の団体ではなく、圏域としてどうやっていくかということになるのでは、と思います。

(市長)

まずもって、専門的な方々からこれだけ多くの事を熱く語っていただいたことに、本当に感動しています。気持ちを持って私たちの圏域について考え、取り組んでいただいていることにとっても感謝しておりますし、私たちも、これからも皆さんに参加し続けようと思っただけのような定住自立圏にしたいと思っています。今後とも、ぜひよろしくをお願いします。

さて、私自身は、皆さんから言われたようにテーマを絞り、評価をしっかりしたいと思っています。その中で、皆さんの言われるように「この街に移り住みたい」という外からの視点が非常に重要になってくるので、これはこれでしっかり考え、テーマを絞り込みたいと思います。

また、今、ここに住んでいる人たちには誇りがあると思います。その誇りを、これからもここに住みつづけたいと思える視点をしっかり出し、時に組み合わせた発想を持って取り組み、定住自立圏で生まれた事業がやっていてよかったと思えるよう、10年後にやってくれてありがとうと言われるような事業にしていきたいと思っています。

今後とも、皆さんのお力をお借りしたいと思っています。またよろしくをお願いします。

(加藤会長)

ちょうど時間となりましたので、司会を事務局にお返しします。

(事務局)

長時間に渡り、活発にご協議頂き、ありがとうございました。第2次ビジョンの振り返りから第3次の取り組みに対する意見まで、非常に幅広いご意見をいただき、事務局の方でまた取りまとめさせていただこうと思います。評価については、今取り組んでいる連携市町村と考えていこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではこれを持ちまして、第3回ビジョン懇談会を終了させていただきます。

(終了)